

西宮 えびす



平成七年一月十七日に突発した阪神大震災で全壊した社務所の改築工事が終わり、新社務所が竣工しました。
新社務所には事務機能の他、授与所、祈禱者の控え所、団体参拝者の休憩所、資料室などを備えています。
この新社務所の竣工で当社の四年間にわたる震災復興工事は終了しました。



平成11年
夏号

えびす 平成11年 夏号

▼四季の境内(えびすの森)



◎編集室から

震災復興奉告祭、太々神楽祭と全国各地から多くの崇敬の方々にお集まりを頂き、誠にありがとうございました。お陰をもちまして震災から復興工事も終わり、新装なった社務所等の施設もご覧頂くことができました。これらの施設を有効に活用して、より一層のえびす信仰の普及を目指して参ります。

37年前、世界で初めてヨットによる太平洋単独横断に成功した堀江謙一さんは今、サンフランシスコ金門橋から明石海峡大橋を目指してピヤだるとベトボトルで作られたりサイクルヨットで航行中です。還暦を迎えても衰えることのないチャレンジ精神に自然の強じんさを感じます。航海の安全と益々のご活躍をお祈り申し上げます。(英)

西宮えびす平成11年夏号(通巻第11号)

平成11年6月1日発行

発行/西宮神社

〒662-0974 兵庫県西宮市社家町1-17

TEL/0798-33-0321 FAX/0798-33-5355

編集/諸務課広報

デザイン/OHTAファーゼン

資料提供/早稲田大学

歡喜光寺

協力/(有)ながさき

和神社

お知らせ

③夏祭り・えびす萬灯籠



②夏越の大祓・大茅輪くぐり



①おこしや祭り・びわ娘



④例祭・だんじり巡行



⑤観月祭・女人舞楽

⑥宮水まつり・酒蔵ルネサンス



① おこしや祭り◆六月十四日
えびす様が居眠りをされたと伝えられる御旅所までお神輿やゆかた姿のびわ娘が行列を連ねます。御旅所では神楽の奉納やびわの無料配布が行われます。

② 夏越の大祓◆六月三十日
六月の大祓式は「夏越しの大祓」といわれ、暑い夏を越すために欠くことが出来ないものです。人形でお祓いをした後、大茅の輪くぐりが行われます。

③ 夏祭り◆七月二十日
午前中の祭典と湯立神楽に引き続き、夕刻からは境内外約三百基の灯笼に灯が入られ、拝殿前の特設舞台上で舞楽が奉奏されます。

④ 例祭・だんじり巡行
◆九月二十二日・二十三日
桃山時代までは兵庫・和州岬まで船渡御をしていた由緒あるお祭り。現在は祭典のみが厳粛に斎行され、氏子青年会によるだんじりが市中を巡行します。

⑤ 観月祭◆九月二十四日
中秋の名月、拜殿舞台で雅楽の調べに合わせてあやかな女人舞楽が披露されます。祭典後は神社会館でお月見料理の晩餐の宴が開かれます。

⑥ 宮水まつり・酒蔵ルネサンス
◆十月二日・三日
灘酒に欠くことのできない「宮水」への感謝と市内の酒造会社の共同銘柄「えべっさんの酒」の醸造祈願祭が行われます。
また二日午後からは、境内の特設舞台上で文楽や人形芝居などの上演、酒造会社や協賛企業が出店して「酒蔵ルネサンス」が開催されます。

『えびす信仰事典』刊行
福の神を代表する「えびす神」についての新旧の論考を集成し、その謎多き神の実像に迫ると共に、広く全国で行われているえびす講や郷土資料を都道府県ごとに調査、豊富な写真・図版で紹介しています。



編者/吉井良隆(西宮神社宮司)
刊行記念特別定価 14,000円
出版社/戎光祥出版(株)

震災復興完了にあたり



西宮神社
宮司 吉井良隆



ご挨拶



平成七年一月十七日午前五時四十六分。この瞬間に、西宮市は淡路島野島断層を起点とする「阪神・淡路大震災」の直撃を受け、千名を超える死者、四万棟を超える全半壊家屋をはじめとして、前代未聞の大被害に見舞われました。それまで当地の人々が築き上げてきた多くの貴重なものがこの一瞬に失われました。当社も例外でなく、激震によって本殿が傾き、国の重要文化財の大練塀・表大門をはじめとした摂末社の多くが倒壊するという最悪の事態を経験したのであります。しかし、その悪条件のなかにもかかわらず早速全国各地の神社関係者の方々をはじめ厚い崇敬者の皆様方よりご来社、お見舞いを賜り、物心両面にわたって温かいご支援の手を差し添えていただき、どんなにボランティア活動のすばらしさに感動したことか、実に有り難さに涙こぼれる思いをいたしました。多くの被災者の皆さんの気持ちも全く同じであったのではないかと思います。私どもはこれのご恩に報いるには、いち早く復興しご神慮をおなぐさめすること以外にはないと決心し、日夜職員を激励し、文字通り全市を挙げての懸命の復旧、復興への努力が続き、四年を過ぎた今、ようやく西宮の街は落ち着きを取り戻してきたように思われます。本殿並びに倒壊した大練塀・表大門の修復がなり、かつての美しい姿を取り戻しています。これには担当された各建設会社の献身的な努力の賜でありまして心から感謝しております。

今はこの大震災という未曾有の試練をようやく乗り越えたという安堵感と同時に、当社の復興がかったの門前町としての役割を果たしたように、新しい時代の西宮市発展の原動力にもなればと念願している次第であります。

「新しい酒は新しい革袋に盛れ」とか申します。復興完了を機として当社の一層の飛躍を期待しながら、職員一同努力を重ねてまいりたいと考えておりますので、皆様方の更なるご指導、ご支援をお願い申し上げます。

復興奉告祭

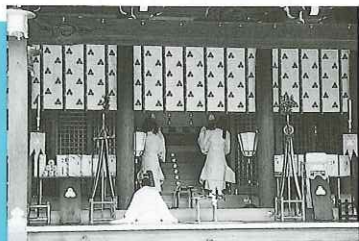


平成七年一月の阪神大震災で境内一円 of 建築物に大きな被害を受けましたが、この度復興工事が完了したことに伴いまして三月二十五日、二十六日の両日に亘りまして復興完了奉告祭が斎行されました。

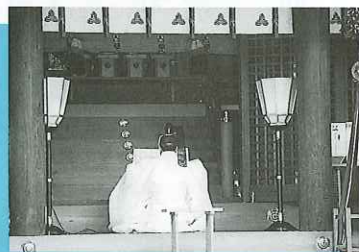
二十五日は神社関係者と全国からの奉賛者約百五十人が参列、午前十一時から祭典が斎行されました。祭典では、修祓ののち本殿に神饌がお供えされ、宮司が祝詞を奏上して災害復興の完了を奉告、宮司に続いて八馬責任役員、神社関係者を代表して木山大神神社宮司、崇敬者を代表して西宮皇学館大学学長が玉串拝礼を行いました。

奉告祭終了後、会場を神社会館へ移して直会が行われました。直会では、宮司から奉賛者を代表して辰馬白鷹株社長と復興工事施工各社に感謝状と記念品が贈られた後、八馬責任役員、西宮皇学館大学学長の祝辞、辰馬責任役員の乾杯の発声で宴が開かれました。

二十六日も同様に各地の奉賛者約百名が参列、奉告祭に引き続き神社会館で直会を開催、奉賛者を代表して諸国講社の池ヶ谷氏と漫才コンビちゃらんぼらんの大西氏に感謝状と記念品が贈られた後、蓮沼総代の祝辞、菅市会議員の乾杯の発声で宴が開かれました。



▲外陣の御簾を開く



▲宮司による祝詞奉呈



▲参列者を代表して西宮皇学館大学学長の玉串奉奠



▲祝辞をのべる八馬責任役員



▲奉賛者を代表して感謝状を受ける、辰馬白鷹(株)社長



▲辰馬責任役員による乾杯の発声



▲なごやかな雰囲気の中開かれた直会



▲神社役員列拜

復興へのあゆみ

- ◆平成七年
 - 三月十八日 大練塀現代鉄混入式
 - 三月十八日 大練塀復旧工事完了
 - 三月十八日 末社宇賀魂神社・火産靈神社正遷座祭斎行
 - 三月十八日 末社宇賀魂神社・火産靈神社正遷座祭斎行
 - 三月十八日 表大門復旧工事完了
 - 三月十七日 震災復興折願祭斎行
- ◆平成八年
 - 三月十八日 大練塀現代鉄混入式
 - 三月十八日 大練塀復旧工事完了
 - 三月十八日 末社宇賀魂神社・火産靈神社正遷座祭斎行
 - 三月十八日 末社宇賀魂神社・火産靈神社正遷座祭斎行
 - 三月十八日 表大門復旧工事完了
 - 三月十七日 震災復興折願祭斎行
- ◆平成九年
 - 二月八日 末社大國主西神社・百太夫神社・神明神社 沖惠比須神社・銅鐘屋復旧工事完了
 - 四月三日 大鳥居竣工通初め式
 - 五月〇日 灯籠移築工事完了
 - 六月〇日 末社松尾神社・玉垣復旧工事完了
 - 八月三日 神池・神苑玉垣・六英堂復旧工事完了
 - 十月三日 石造物復旧工事完了
 - 十一月三日 境内境界塀復旧工事完了
- ◆平成十年
 - 一月〇日 社務所再建工事着工
 - 二月五日 社務所地鎮祭斎行
 - 五月三日 末社市杵島姫神社正遷座祭斎行
 - 七月〇日 社務所上棟祭斎行
 - 七月六日 社務所竣工祭斎行
- ◆平成十一年
 - 三月五日 復興完了奉告祭斎行
 - 三月六日 復興完了奉告祭斎行



二月六日 本殿・拝殿補強工事及び復旧工事調査開始
諸社社復遷座
南門復旧工事着工



二月〇日 本殿・拝殿補強工事及び復旧工事調査終了
復旧工事計画完成
二百 仮本殿改築工事着工
三月二日 本殿・拝殿復旧工事着工
二〇日 仮本殿改築工事完了
四月一日 本殿復遷座祭斎行
七月八日 南門復旧工事完了
三月〇日 祓所・手水舎復旧工事完了



八月二日 表大門大練塀復旧工事着工
五百 末社松尾神社正遷座祭斎行
九月三日 大蔵省より特別免稅措置の許可
十月〇日 本殿・拝殿復旧工事完了
十月六日 本殿正遷座祭斎行
十一月〇日 表大門復旧工事完了



三月十八日 大練塀現代鉄混入式
三月十八日 大練塀復旧工事完了
三月十八日 末社宇賀魂神社・火産靈神社正遷座祭斎行

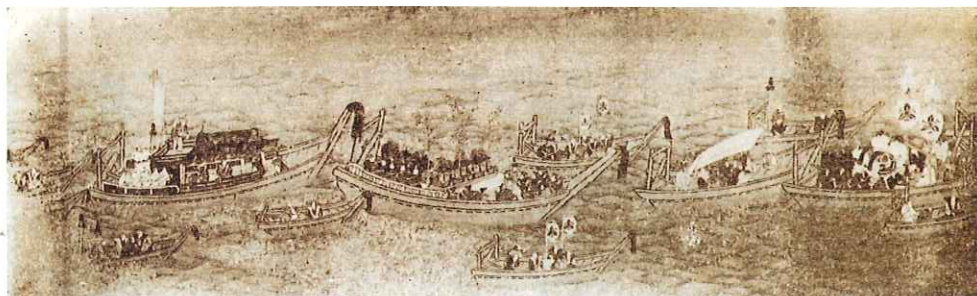


三月五日 復興完了奉告祭斎行
三月六日 復興完了奉告祭斎行

海上渡御

日本第一の大神事
兵庫和田岬への神幸

船渡御再興への手掛かりを探る



神幸海上図(西宮大神本紀)



和田岬御旅所祭典図(西宮大神本紀)

昭和29年に再興した渡御祭



当社の神輿が広田社・南宮社の神輿と共に毎年八月二十二日に兵庫和田岬へ神幸していたことは、古文書の記録などから伺うことができます。行きは、幾艘もの船を海上を所狭しと連ね、その飾りの旗や幕の様はまるで花紅葉を波間に浮かべたようだと記されています。和田岬の仮宮では、花を飾り、鼓笛を鳴らして舞などを奉納した後、復路は馬を連ね陸路六里をその日の内に帰ることを産宮参りと言っていたようです。

かつては、一年に七十五度ある神事の中で一番賑やかであった日本第一の大神事も織田信長による社領没収により廃絶されてしまいました。

江戸時代からは神幸は行われず祭典のみが厳修され、明治時代に新暦の九月二十二日に改められて現在では例祭となっています。

昭和二十九年からは例祭の後、神輿行列が市内を巡行する渡御祭が再興されましたが、これも平成七年の阪神大震災以降、中止の止む無きに至っております。
この由緒ある船渡御の再興へ向けて、歴史を振り返ってみました。



渡御祭のにぎわい(平成6年)



(文久2年改兵庫津之図)

◆和田神社

元の和田神社の社地は蛭子の森と称され、かつての西宮から来た神輿の休息所であったと伝えられる。

◆三石神社

和田岬にある三石神社にはかつて三つの石があって広田・西宮・南宮の三基の神輿を置く場所であったと伝えられる。

◆蛭子神社

柳原のえべっさんとして知られているが、元は現在より南方の西宮内にあった神輿の休息所で、神幸を終えた神輿がこれより街道を東へ還御していたと伝えられる。

◆清盛塚

仁安2年(1167)に太政大臣になった平清盛は、大輪田ノ泊の修築を行い、治承4年(1180)兵庫福原に遷都をする。

◆真光寺

正応2年(1289)8月、時宗の開祖一遍上人が同寺に滞在中危篤になったが、22日が西宮の神幸と聞いて臨終の日を一日延ばし西宮の神主に面会、十念を授けたとある。上人の廟塔が同寺に存する。

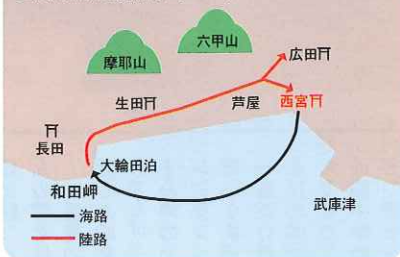
◆神幸の起源

明らかではありませんが、福原への遷都を進めていた平清盛が神助を願う気持ちから大輪田ノ泊への神幸の要請や、広田・西宮・南宮社の大阪湾における権益の誇示、また和田岬への神幸を「産宮参り」とも称していたことから淡路島より流れついと伝わる蛭子大神や広田神社の創建に関わる神功皇后伝説との関係なども考えられます。



一遍上人と西宮の神主との出会い(国宝・一遍上人絵伝)

当時の海上渡御祭のルート



◆神幸にまつわる伝説

◆御会殿跡
当社の南門の少し南西に御会殿跡というところがありましたが、ここは神幸の列を整える所で当時は海岸であったようです。

◆御茶屋所町

夙川の西畔に御茶屋所町という地名が残っていますが、ここは和田岬から還御の際に神輿が休息所をするところであったようです。
また和田岬周辺にも御茶屋所といわれていたところが残っています。

◆馬家の由来

西宮の馬のつく名字の家は、和田岬から陸路還御の際に供奉の馬の手配をしたり、童男や祭りの役を勤めていたと伝えられています。西宮市史によると馬家姓は、一馬から十馬まであったが辰馬、葛馬、小上馬など記録にあるだけでも二十を超えます。



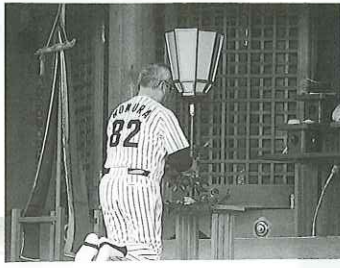
辰馬家より奉納された青銅馬(後藤 貞行作)

古文書に残る記録

- 治承四年(一一八〇)「山桃記」
八月二十一日の西宮稻の様子
- 正応二年(一一八九)「一遍上人絵伝」
上人臨終にあたり西宮の神主に十念を授ける
- 応永二十年(一四四一)「百川神祇伯資忠王記」
八月二十一日兵庫御幸
- 元龜二年(一五七二)「年中御神事」
八月二十一日大輪田御神事
- 寛永二年(一六二五)「寛永書」
神幸の廃絶について
- 寛延二年(一七四九)「葛馬家の由来書」
祭礼の規模や行列次第



本殿で玉串拝礼をする監督の後姿にはひと味違う雰囲気があったよう。



野村監督たのんまっせ... 必勝祈願には余裕の笑顔がときおりのぞく。



真剣な表情で祈願する選手たち。



えべっさんに扮した、阪神米穀(株)の田中社長より、「えべっさんのお米」が贈られた。

応援に駆けつけた多くのファン。

野村監督とえべっさん

阪神タイガース必勝祈願

野村監督の就任で期待が高まる阪神タイガースの選手らがプロ野球セ・リーグ開幕を前にした三月二十四日に恒例の必勝祈願に訪れました。午前十時、球団のバスで到着した約百五十人は、六甲おろしの流れる中を拝殿に整列、必勝祈願に引き続き阪神米穀(株)田中社長から「えべっさんのお米」の目録が贈られると監督も思わずにっこり。必勝祈願後のインタビューでは「えべっさんはよくがんばっているよ。でも今日は商売繁盛ではなく必勝祈願だね。」と念を押して「南海ホークス時代に近くに住んでいて、えべっさんには親しみがある。訪れたのは十年ぶりくらいだが、何か御利益がありそうだ。」と語っていました。

タイガースが勝てば関西が活気づく。そんな予感のする阪神タイガースの必勝祈願でした。

Art

ちやらんぼらんの大西さん
復興記念に自作の油絵を奉納

画家としても活躍されている尼崎市在住の漫才師、大西浩仁さんが当社の新社務所竣工を記念して八十号の大作三枚を奉納、十二月十四日に奉納式が行われました。大西さんは高校の同級生富吉真さんを相方に漫才コンビ「ちやらんぼらん」を結成、吉本興業所属の中堅漫才師として活躍されている一方、震災で被災した自宅の銭湯をアトリエに改築して創作活動にも励んでおられます。



大切に保存されてきた貴重な資料。

復興奉告祭に参列のために焼津市より来社された池ヶ谷氏夫妻。

諸国講社の原点が蘇る

三月二十六日震災復興奉告祭の第二日目に諸国講社の池ヶ谷章治氏夫妻が来社。池ヶ谷家は代々材木商を営んでおられましたが、章治氏の曾祖父、栄吉氏が明治十二年に内務省の免許を得て西宮講社を結成。以来、現在に至るまでの配札先、本社からの通達などの資料をご持参されました。特に当社にも被災などで戦前の資料は殆ど残っておらず、明治期の静岡県下での配札状況や戦中戦後の紙不足の時期のやり繰りの様子、にせ札に対するお触れ書きなど、諸国講社の変遷をたどる上で貴重な資料となるものです。



奉納式で宮司より受領書を受け取る大西さん(左は相方の富吉さん)

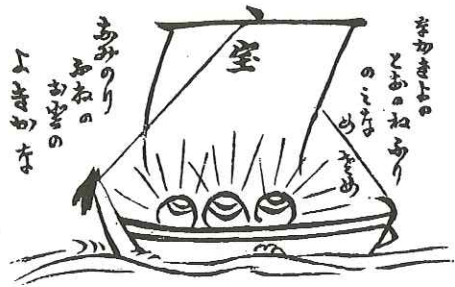


宝船

宝船の歴史

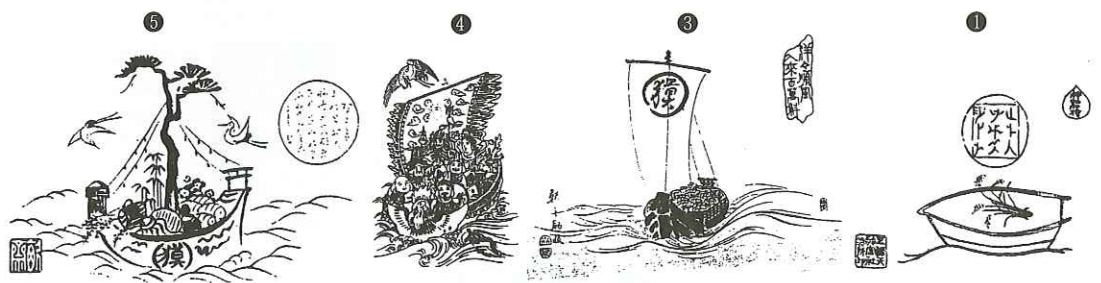
正月に宝船の絵を枕の下に入れておくと、吉夢を見るといわれています。宝船の風習は、室町時代頃からおこなわれてきたようで、最も古い図柄とされている宝船①京都五条天神社のものは、船の中に一束の稲が乗せられているだけです。当社で旧来出していた宝船②も宝珠が三つ光りを発しているだけのシンプルなものですが、時代が下ると船っぱいに米俵や財宝が詰まった宝船③になってきます。この宝船には、洋々順風入来百万斛と肩印が押されています。これからわかるように宝船は入船の姿になっています。よい物は全て海の方から渡ってくるという舶来品尊重の思想が感じられます。宝船という名称は船に米俵・宝珠などの宝物を積んでいることからきていますが、現在の宝船の図には、これに七福神が乗っているものが多く、「なかきよ」とおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな(長き夜の遠の眠りの皆目覚め波乗り船の音のよきかな)という上から読んで下から読んでも同じ音となる回文歌が添えられているものもあります。回文は終わりがないつまり無限の幸せを願う気持ちが込められています。帆や船腹には夢を食う動物ということで「猿」と書かれていたり、松樹を配している宝船④もあります。松樹は古来から神様の依代として尊重され西宮の本社で配札する神影札にも松樹が添画されています。

② 西宮神社の宝船



宝船と七福神

七福神は日本の神様えびす以外、インドの大黒天・弁財天・毘沙門天と中国の福祿寿・寿老人・布袋の取り合わせで、なんでもよいものを取り入れようと心掛けています。日本人の心情の現われであるといわれています。関東方面には宝船に乗っていない七福神の姿も目につきますが、入船の観念は瀬戸内のもので、中国・朝鮮などから海を渡って来る文物は全て西から入り、瀬戸内海を通り摂津の国で陸揚げされるといふ感覚は、太平洋に面する地方とは少し違うのであります。



ヨットマン 堀江 謙一さん

「えびす様と私」

えびす様は、海の守り神です。私は、西宮の浜とは格別のご縁があり、西宮神社にも機会がある毎にお参りをした。殊のほか親しみをもってえべっさんの森を拝しています。

一番最初に太平洋を単独横断した昭和三十七年のことは今でもはっきりと覚えています。その時のマリーメイド号は、サンフランシスコに寄贈しましたから手元にはありませんが一度だけ里帰りをしたことがあります。はるばる日本へ運んで来て、神社のすぐ南隣の浜脇中学校で展示しました。その後サンフランシスコから日本へ向かい、西宮に到着したミニマリーメイド号は新西宮ヨットハーバーに、また今年五月にオープンした西宮市貝類館の池には、縦回り世界一周を果たした時に使ったマリーメイド号が展示されています。このように西宮には、私にとって切っても切れないご縁があり、海の神様えびす様との繋がりも深く、いつも感謝の日々を送っています。